

[11]

氏名	佐藤 晴彦 <small>さとう はるひこ</small>
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	博第488号
学位授与の日付	平成27年9月18日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	近世漢語の新研究
論文審査委員	主査教授 内田 慶 市 副査教授 松浦 章 副査教授 二階堂 善 弘 専門審査委員教授 沈 国 威

論文内容の要旨

本論文の構成は以下の通りである。

第一章『三言』における馮夢龍の創作

第一節 馮夢龍の言語的特徴を探る

1.1.1 『平妖傳』新探—馮夢龍の言語的特徴を探る

1.1.2 『平妖傳』新探(2)—馮夢龍の言語的特徴を探る

1.1.3 『清平山堂話本』『熊龍峯小説』と『三言』—馮夢龍の言語的特徴を探る

第二節 『古今小説』編

1.2.1 『古今小説』における馮夢龍の創作—言語的特徴からのアプローチ

1.2.2 『古今小説』における馮夢龍の創作—言語的特徴からのアプローチ(改稿)

1.2.3 『古今小説』各巻の成立をめぐる—Hanan 氏説の検討

第三節 『警世通言』編

1.3.1 『警世通言』における馮夢龍の創作—言語的特徴からのアプローチ—

1.3.2 『警世通言』第四巻の成立をめぐる

1.3.3 『警世通言』各巻の成立をめぐる—Hanan 氏説の検討

第四節 『醒世恒言』編

1.4.1 『醒世恒言』における馮夢龍の創作(I)—言語的特徴からのアプローチ—

1.4.2 『醒世恒言』における馮夢龍の創作(II)—言語的特徴からのアプローチ—

1.4.3 『醒世恒言』と『石點頭』—Hanan 氏説の検討

第二章 異体字繫年論

第一節 小説編

2.1.1 水滸傳

2.1.1.1 容與堂本『水滸傳』成立の一側面

2.1.1.2 『水滸伝』は何時ごろできたのか?—異体字の観点からの試論

2.1.1.3 國家圖書館藏『水滸傳』殘巻について—嘉靖本か?

- 2.1.1.4 国家图书馆藏《水浒传》残卷出版时期考证及相关问题探讨
- 2.1.1.5 『水滸傳』“嘉靖”残卷について
- 2.1.1.6 『水滸傳』研究方法論—香坂順一著『<水滸>語彙の研究』の書評を兼ねて
- 2.1.2 金瓶梅
 - 2.1.2.1 『金瓶梅詞話』をめぐって
 - 2.1.2.2 『金瓶梅詞話』をめぐって(その二)
 - 2.1.2.3 説<金瓶梅詞話>—主要是影印本爲主
- 2.1.3 その他
 - 2.1.3.1 『三遂平妖傳』は何時出版されたか?
 - 2.1.3.2 元明期の文字表記—“個”の出現をめぐって—
- 第二節 戯曲編
 - 2.2.1 『脈望館鈔校本古今雜劇』新探
 - 2.2.2 『改訂元賢傳奇』はどの時期の言語を反映しているのか?
 - 2.2.3 『劉希必金釵記』をめぐって—語彙、文字表記からのアプローチ
- 第三章 言語接触編
 - 第一節 漢兒言語
 - 3.1.1 『元版孝經直解』解説
 - 3.1.2 『孝經直解』校訂
 - 3.1.3 旧本『老乞大』の中国語史における価値
 - 3.1.4 “一壁有者”考
 - 第二節 琉球官話課本
 - 3.2.1 琉球官話課本研究序説—写本『人中画』のことば(1)—
 - 3.2.2 琉球官話課本研究序説—写本『人中画』のことば(2)—
 - 3.2.3 琉球写本官話課本のことば
- 第四章 語彙・語法編
 - 4.1 “難道”小考
 - 4.2 “難道”小考(2)—宋元語法史
 - 4.3 宋元語法史試論—“~里地”“~里路”“田地”“地面”をめぐって—
 - 4.4 元明語法史試論—“~里地”“~里路”“田地”“地面”をめぐって—
 - 4.5 “光景”考—近世語語彙研究の方法
- 第五章 歴史文法編
 - 5.1 『中国語歴史文法』解体—断代史改編への試み—
 - 5.2 『中国語歴史文法』解体(Ⅱ)—断代史改編への試み—
 - 5.3 『中国語歴史文法』解体(Ⅲ)—断代史改編への試み—
 - 5.4 近代漢語研究の基本問題—中国旧小説、戯曲を資料として—

第一章は馮夢龍が編纂した『諭世明言』(『古今小説』)『警世通言』『醒世恒言』のいわゆる『三言』に収録された話本の作品が、どの時代に作られたものであるかという問題について論じている。特に、馮夢龍の『三遂平妖傳』(旧本)と、それを増補改訂した『天許齋批點北宋三遂平妖傳』(新本)という二種の『平妖傳』に着目し、新本 40 回から旧本 20

回分を差し引いた部分が馮夢龍の増訂部分として、そこに馮夢龍の言語が反映されていると考え、語彙の新旧差を詳しく調査した上で、更には、『清平山堂話本』『熊龍峯小説』などとの比較を通して馮夢龍の言語的特徴を明らかにした。

第二章は「異体字繫年論」という氏独自の研究方法を元に、旧白話小説や戯曲の成立時期を論じたものである。「異体字繫年論」というのは、異体字の変化を根拠にして、資料の成立や出版時期を判断しようとするもので、氏によって初めて提唱されたものである。たとえば、方位詞“li”には、“裏”“里”“裡”ともう一つ“[ネ里]”という4つの異体字があり、歴史的には、裏>里>[ネ里]>裡の順で出現し、“裏”は唐代、宋代を通じて使われ、元代に“里”が使われ、明代になると“裡”が出現する一方で、それより前に“ネ里”という文字が使われたことなどが明らかになったが、氏はこうした異体字の変遷を根拠に容與堂本『水滸傳』や『金瓶梅詞話』『平妖傳』の成立時期を確定している。氏はまた、この方法によって、小説だけでなく戯曲の『脈望館鈔校本古今雜劇』や『改定元賢傳奇』なども取り上げ、前者では于小穀本>古名家本>内府本>息機子本の順に古いものを残していると論じている。

第三章は言語接触編と名付けて、「蒙文直訳体」「漢兒言語」と琉球官話課本を論じている。いわゆる、アルタイ語系との接触によって生ずるピジン、クレオール現象であるが、モンゴル語との関係では『元版孝經直解』を、朝鮮語との関係では『老乞大』を取り上げている。また、琉球官話の言語的研究も氏によって初めて本格的に開始されたものであり、まさに先駆的業績と言えよう。

第四章では個別的な語彙・語法の問題を論じている。

第五章、歴史文法編は、中国近世語研究におけるバイブル的存在である太田辰夫『中国語歴史文法』を通史へ改編しようとする壮大なる試みであるが、申請者も述べているように「解体」は行ったが、最終的な改編にまでは至っていない点は些か残念ではあるが、その方向は十分評価できるものであり、今後の完成を期待するものである。また最後の「近代漢語研究の基本問題—中国旧小説、戯曲資料として—」は、中国語を歴史的に研究する場合、最も基本的な問題、根本的な問題は、言語資料の選択にあることを詳しく述べたもので、後代の研究者への道しるべとなるべきものである。

論文審査結果の要旨

本論文は、『三言』（『喻世明言』＝『古今小説』『警世通言』『醒世恒言』）を中心とする馮夢龍の言語的特徴の解明に始まり、近世白話小説に見られる異体字に着目してその成書年代、出版時期を推定するという「異体字繫年論」という氏独自の新しい研究方法の提唱、また、元版の『孝經直解』や朝鮮資料の『老乞大』、さらには琉球官話資料といったいわゆる「周縁資料」を駆使した言語接触と近世語の関係の論考、更には、現代語までも見据えた個別的語彙・語法に関わる論考と、いざれも、実に幅広く、極めて多くの資料に裏付けされた緻密な検証に基づく研究成果で、昨今の電子テキストを使った安直な研究とは明らかに一線を画す重厚な研究と言える。特に、「異体字繫年論」は、今後の近世白話資料の「読み方」の規範ともなり得る方法である、

文化交渉学との関連で言えば、特に、第三章は、元朝資料、朝鮮資料、琉球資料に基づく言語接触の観点から近代語史を論じたもので、まさに「周縁からのアプローチ」そのものである。

最終章の歴史文法編は太田辰夫『歴史文法』への大胆な改編の試みを述べたものであり、師の学問への壮大なる挑戦とみることが出来、まさに学問の王道＝批判精神を具現化したもので、氏の学問への真摯な取り組みが見て取れる。

以上のように、本論文は近世漢語研究の金字塔ともよべるものであり、今後、斯界への貢献は計り知れないものがある。私たちはここに文化交渉学を基盤とした新しい近代の言語接触研究と中国近世語研究の融合の成果を手にすることが出来たのであり、まさに、文化交渉学の代表的業績として本研究科の授与する博士の学位にふさわしいものであると判断するし、よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。